

平成21年6月29日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18700586  
 研究課題名（和文） 「なかよし」の両義性の分析による幼児理解の方法の探究  
 研究課題名（英文） The understanding of peer relations  
 analyzed from a view point of ambiguity  
 研究代表者  
 岩田 恵子（IWATA KEIKO）  
 日本女子大学・家政学部・助教  
 研究者番号：80287812

研究成果の概要：「なかよし」という関係は、肯定的な側面で捉えられることが多く、葛藤的な側面を見落とされがちであった。そこで「なかよし」ということに含まれる両義性を問いながら、保育の場における幼児理解や遊びの援助に関する示唆を得ることを本研究の目的とし、幼稚園におけるフィールドワークを行った。研究のプロセスそのものを対象に幼児理解の方法に関する分析を行うとともに、幼児期の仲間関係、仲間理解に関するエピソードの検討を行った。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,800,000	0	1,800,000
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	270,000	3,670,000

研究分野：保育学・発達心理学

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：教育系心理学、幼児理解、幼稚園、ナラティブ、遊び、模倣

## 1. 研究開始当初の背景

保育の場において子どもたちが同年代の仲間と関係を築き「ともだち」となっていくことは、ごく素朴に成し遂げられること、あたりまえのこととしてとらえられていることが多い。筆者自身も幼児の親しい関係として疑問を持たず「ともだち」「なかよし」というカテゴリを研究の対象としてとりあげてきた。しかし、保育場面における子どもたちの遊ぶ姿を見る機会を深めるうちに、「ともだち」や「なかよし」ととらえられる関係

は楽しいばかりではなく、悲しみや怒りなども含んだ複雑な関係であることが見えてきた。また、「なかよし」という関係を、筆者は無意識に肯定的な側面でしか捉えておらず、葛藤的な側面を見てこなかったことに気づかされた。大人はもちろん子どもたち自身も「なかよし」であることを大切なことであるととらえ、その関係に含まれる葛藤的な側面は見逃されがちである。そこで「なかよし」ということに含まれる両義性を問い、保育の場における幼児理解や遊びの援助に関する示唆を得ることを本研究の目的とした。

また、このように「なかよし」を両義性からとらえるという視点から研究をすすめるに際して、研究方法の探究が必要であると考えた。幼児期の「なかよし」を関係論的にとらえるためには、保育現場の当事者と研究者との関係のありかた、研究者自身のなかよしの見方などの見直しが必要となる。本研究ではエピソードをとらえる際に研究者自身が出会った出来事の意味を常に問いながら観察を深めていくナラティブ的な探究を積極的に行うことを予定した。この試みにより、研究者自身のものの見方を再検討しながら「なかよし」記述すること自体の再検討を研究に組み込み、研究方法への新たな視点を得ることをめざそうとした。

さらに、幼児期の仲間関係の中でも、他者理解に関する検討も視野にいれた。「心の理論」について日常場面の中でとらえた研究が増加している中で、本研究も筆者自身が今まで取り組んできた観察をベースに「心の理論」に関する日常的な場面での研究をひきついでたものとした。しかし、これまでと異なる観点は「なかよし」という現象を中心におき、相手を理解し親しくなることを当事者である子どもたち同士ばかりではなく、その周囲をとりまく子ども・大人を含めた共同的な現象としてとらえていくことである。心をよむことが共同行為であることが指摘されているにも関わらず、そのように関係的に幼児期の他者理解をとらえた研究はほとんどみられなかった。また、従来の仲間関係研究は、どうしても量的な研究や友人関係の源を個人の能力に帰属する研究が主であった。

本研究で「なかよし」関係を状況的なものとして描く新たな研究方法を探る中で、「なかよし」の両義性にせまりつつ、幼児期の他者理解に新たなアプローチを試みたいと考えた。そしてこの試みにより幼児が他者を「わかること」だけではなく「共感」し「わかりあうこと」への理解を深められると考えた。

## 2. 研究の目的

研究の背景から、下記の3点を探究することを本研究の目的とした。

- (1) 幼稚園でみられる「なかよし」とみられるエピソードを関係論的に分析すること。
- (2) 「なかよし」の両義的な分析から保育場面における幼児理解の方法を検討すること。
- (3) 「なかよし」関係を分析することから幼児期の他者理解のありかたについて検討すること。

## 3. 研究の方法

週1～2回、都内私立幼稚園の1クラスを中心に、ビデオを用いた観察を行った。毎回、出会った出来事をフィールドノートにまとめ、そこに記述した中でも特に自分にとって印象的だった出来事をA4版の用紙1枚にまとめて幼稚園の先生方に翌回の訪問時にお渡しした。また、筆者のビデオ記録をもとに保育者との共同の研究会をおこなった。

このフィールドワークのプロセスそのものの文字記録とビデオ記録を下記の視点から分析を行った。

- (1) 幼稚園でみられる「なかよし」に関するエピソードの分析については、ある女児の集団をとりあげ、彼女たちの関わる遊びの中でも、「おいかけっこ」「おにごっこ」に関するエピソードの検討を行った。
- (2) 「なかよし」の両義性を考慮しながら、保育場面における幼児理解の方法を探究する際には、保育者との日常のやりとりや共同でのエピソードの検討などから、子どもの意味の世界へ入って行く筆者自身のプロセスを検討した。
- (3) 「なかよし」関係を分析することから、幼児期の他者理解のありかたを検討するに際しては、幼稚園入園期の子どもの「模倣」にまつわるエピソードの検討を行った。

## 4. 研究成果

- (1) 幼稚園でみられる「なかよし」とみられるエピソードの関係論的分析

一緒に遊ぶことの多かった女児のグループの遊びを「おにごっこ」「おいかけっこ」に関連するものにしぼり、彼女たちの3歳児クラス後半から卒園に至る「なかよし」のありかたの変容の分析を行った。彼女たちの「おにごっこ」「おいかけっこ」にまつわる遊びを見ていくと、ぐるぐるまわる、逃げるといった同調を楽しむ「なかよし」から、よく一緒に遊ぶ関係であるからこそ、一緒に楽しむには、お互いに役割を担い役割を調整する葛藤も生じる「なかよし」へと変化していた。この変化は、「ルールがわからない」状態から「ルールがわかる」ようになったからもたらされたのではないように考えられた。それは、ルールは明らかにわかっているにもかかわらずそのようにふるまえないエピソード、さらには泣いて遊びが維持できなくなるエピソードから考察された。

おにごっこになる以前のおいかけっこでは一緒に動きをととても楽しんでいましたが、それだけではない遊びを模索する中で仲間内で「おいかける役」「おいかけられる役」に分かれる遊びを見いだしていったとき、「オニ」になることを受け容れることの難しさ、一緒に遊ぶ「なかよし」内での緊張感があらわれ、かえって難しい顔をしている子どもたちに出会うことが多くなった。しかしそのような葛藤・緊張の中でも遊びを繰り返す中で、様々な葛藤を互いに感じつつ、遊びを維持し、「なかよし」関係が深まっていることが伺えた。役割交代する能力、ルール理解の能力、社会的スキルなどのちからもそのような葛藤をのりこえる関係の中でそのようなちからがあるように見えてくると思われる。「ともに」の楽しさも葛藤も味わう関係としての「なかよし」関係が見えてきたと考えられる。

## (2) 保育場面における幼児理解の方法の検討

保育の場に入りながら、日常生活の中で子どもたちを理解したいと思い記録をとり、自らの目に入ったことを克明に記述したつもりでも、また、ビデオカメラの記録をていねいに文字化しても、子どもたちの生きている世界がうまくとらえきれずにもがくことが続いていた。もがきながらも、筆者自身が観察者として場に関わっていることを自覚し、自らの感情も含めてその場について書いていくことが、筆者自身の記述に大きく欠けていたものであったことを意識し始めたころ、筆者の書いた記録が保育者や保護者にとってその子どもを理解する1つの資源となる機会があった。

子どもの世界を内側から描くということは、子どもが見ている世界を描くこと、その子の背負った歴史が見えること、そうなる必然性が見えてくることである。筆者の記述は、そのようには描けていなかったものであるが、読み手の視点によりそのような情報が加えられて、それぞれにとって子どもの世界を理解するきっかけになったのである。

子どもたちの世界を描くとき、ひとつの説明におさまらないのは、あたりまえのことなのかもしれない。保育者、保護者、筆者それぞれがエピソードに記された以外の広い世界でそれぞれが「知っている」子どもたちの世界や歴史があるからである。それぞれがそのような子どもたちとの歴史を背負ってエピソードを読んだとき、そのエピソードが「外側から」淡々と記述したものではあっても、ある子どもを、子ども達の間をより理解し、その理解を共有するきっかけとなったと思われる。それぞれが見ている子どもたちの姿は接し方にも見ている時間にも大きな

幅があり、理解そのものもずれていると思われるが、小さなきっかけで一瞬ではあれ子どもと世界を共有することが可能になったのかもしれない。

このように、外側からの淡々とした記述であつても読み手の視点と子どもたちとの関係の歴史により内側から読み取ってもらうことができた出来事をきっかけに、外側から子どもたちの行為のみを記述していた筆者の視点は、次第に対象の内側、子どもたちから見た世界へも入り込み始めた。また、このように子どもたちの世界を、子ども、保育者、保護者といった多様な視点からながめ、記述を試み、またその子どもをめぐる出来事を保育者とともに語る中で、筆者の記述の視点は、子どもたちの世界の外側と内側とを往復し始める兆しがみえた。研究者自身の感情も含めた出来事のつながりを「物語（ナラティブ）」として記述し探究することで、そこに記述されるエピソードが「問い」を追究することにつながっていくことがようやく実感され始めたように思われる。

## (3) 「なかよし」関係の分析から幼児期の他者理解のありかたを検討

子どもたちが、ともに遊ぶようになるプロセスを理解しようとするときに、平行遊びから連合・協同遊びへとという大きな枠でとらえることが多い。しかし、既に指摘がなされているように、平行遊びもよく見てみると、たとえ直接のやりとりはなくても、まったく独立した動きではなく、相手がやっていることを見ていたり、また見るだけではなく、行為を同じくする「模倣」が生じていたりしている。また、お互いにまねしあつて遊びが広がっていくことも指摘されている。幼稚園に入園した子どもたちが、幼稚園という文化のなかで出会い、ともに遊ぶようになるプロセスをこのような「模倣」という現象を手がかりに考察し、幼稚園入園期の他者理解の変容の検討を行った。ここでは、ある男児Tのエピソードをとりあげながら概略を述べる。

初期に見られたのは次のエピソードのような「思わずつられるような動き」であった。

Mちゃんが、部屋でおおげさに感じるようなのびのびした動きをしているなかで、どしんとしりもちをついた。先生がそんな彼女に「どし〜んとしりもち」とにこにこ声をかける。それと同時くらいにTくんが、Mちゃんがしりもちをついた横に並んで、同じようにしりもちをついてみている。さらにその後、しりもちをついているMちゃんTくんの近くをYちゃんがスキップしながら移動し

ていく。同じようにスキップしながらAちゃんがYちゃんに続く。するとおきあがって同じようにちょっとスキップしてみるTくん。他の子の動きにすっとつられる場面であった。

このときのTの動きは、周囲の子どもたちの動きをじっと見ていて、見ているうちに自分でも同じ行為をふとしてしまっているような雰囲気であった。まねようとしているというよりも、思わず同じ動きをしてしまっており、そのまねは一瞬ではあるのだが、周囲の仲間がいなければ生じない同調という出来事であったと考えられる。

やがてTの模倣は次のエピソードのようなかたちでも見られるようになる。

IくんとSくんのたたかいごっこがはじまる。その様子をTくんが魅入られるように見ている。たたかいごっこをはじめたIくんとSくんは左右対称でたたかいポーズをとったりしている。そのふたりを見ていたTくんはやがて近づき、Iくんの隣に位置をしめる。そのIくんに並んだ位置で、Iくんと同じようなたたかいポーズをとるTくん。2対1のようなかたちのたたかいが展開する。Tくんはあきらかに声、しぐさともにIくんのまねをしているように見える。Sくんには急に敵がふたりになったようなかたちだが、さらにおおきくポーズをとっていた。ひとしきりそのようなたたかいが繰り返された後、Sくんは去り、TくんとIくんは一緒にいる。TくんがついていくのをIくんも受け容れている雰囲気である。また、Iくんはソフトブロックで、Tくんはソフト積み木で武器を作っている。

先のエピソードと比して、Tは明らかにあるひとをまねようと試みているように見える。それはたたかいごっこという相補的なポーズをとっているふたりのうちの片方の傍らに位置し、その相手のまねをしていること、またその行為が以前に比べてはるかに長く続いていることにも現れている。たたかいポーズのあとも、異なる素材ながらも、Iの手元を見ながらつくっているTの姿があり、さらにはIもTの真似をし、相互に模倣をする場面もみられた。

幼稚園という文化の中で子ども同士の間でどのように「模倣」が生じているかを考察したとき、そこから仲間との関係、ともに遊ぶ相手としての仲間の理解の深まりを考察することができた。今後、他の子どもたちの「模倣」の事例も含めて、他者の意図を理解したうえで共感するような他者理解が深まるプロセスについて考察を深めていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 岩田恵子. 見えないものをもとに見る：ごっこ遊びにおける共有のなりたち. 日本女子大学紀要 家政学部, 55, pp. 7-14. (2008). 査読無
- ② 岩田恵子. 入園期の子どもたちが遊びはじめる場面の記述の再検討：問いを探るための記述をめざして. 日本女子大学紀要 家政学部, 53, pp. 15-22. (2006). 査読無

〔学会発表〕(計5件)

- ① 岩田恵子. 幼稚園における子ども同士の遊びのはじまり：仲間の行為の「模倣」の変容, 日本保育学会第61回大会研究論文集, p. 646. (2008. 5. 17). 査読無. (愛知県・名古屋市立大学).
- ② Keiko Iwata. The developmental processes of peer imitation during free play in kindergarten. Proc. of International Society for Cultural and Activity Research (ISCAR2008). (2008. 9. 10). 査読有. (アメリカ・サンディエゴ・UCSD).
- ③ 岩田恵子. 幼稚園での「おにごっこ」場面にみる「なかよし」関係の深まり. 日本乳幼児教育学会第17回大会研究発表論文集, pp. 80-81. (2007. 8. 18). 査読無. (東京都・東京学芸大学).
- ④ 岩田恵子. 保育の場における子どもたちの世界の記述を共有するとき：「読み手」の視点と関わりの歴史によって読みとってもらえること. 日本保育学会第59回大会研究論文集, pp. 888-889. (2006. 5. 20). 査読無. (北海道・浅井学園大学).
- ⑤ 岩田恵子. 内側から見ることと外側から見ることの往復による子どもの世界の記述の探究. 日本質的心理学会第3回大会アブストラクト集, (2006. 8. 5). p. 57. 査読無. (福岡県・九州大学).

〔図書〕(計1件)

- ① 福崎淳子・岩田恵子・府川昭世. 幼児理解と保育相談. 東京未来大学. (2009). pp. 17-85.

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田 恵子 (IWATA KEIKO)  
日本女子大学・家政学部・助教  
研究者番号：80287812